

町村週報

(町村の購読料は会費)
(の中に含まれております)

3071号

毎週月曜日発行

発行所 全国町村会 〒100-0014 東京都千代田区永田町1丁目11番35号：電話03-3581-0486 FAX03-3580-5955

発行人 武居丈二：定価1部40円・年間1,500円(税、送料含む) 振替口座00110-8-47697

<http://www.zck.or.jp>

冬の永平寺 (福井県永平寺町)

林管理のために建てる仮住まいのこと。小川地区の昔からの生活文化だ。交流施設は、この作小屋をイメージした茅葺屋根の小屋だ。最大の人気は、地元食材を使った郷土料理を16個の小皿に盛り付けて提供する、見た目も美しい「おがわ四季御膳」だが、もうひとつ、人を惹きつける大きな魅力がある。景観だ。それも昔からある景観ではない。準備委員会で福島市の花見山を視察し、「小

昨年秋、宮崎県西米良村の小川地区を訪れた。2007年には高齢化率が7割だった林野率96%の山間地だが、この10年で、住民約100人に対して、なんと年間約2万人もの観光客が訪れる地域に変貌。Uターン者も24名誕生している。きっかけは、「平成の桃源郷・おがわ作小屋村」づくりだ。07年、行政から常設の交流拠点の設立・運営を提案され、「座して死を待つわけにいかない」と、07年3月に「小川作小屋村設立準備委員会」を設立。09年10月、オープンにこぎつけた。

「作小屋」とは、自宅から離れた田畑・山林管理のために建てる仮住まいのこと。小川地区の昔からの生活文化だ。交流施設は、この作小屋をイメージした茅葺屋根の小屋だ。最大の人気は、地元食材を使った郷土料理を16個の小皿に盛り付けて提供する、見た目も美しい「おがわ四季御膳」だが、もうひとつ、人を惹きつける大きな魅力がある。景観だ。それも昔からある景観ではない。準備委員会で福島市の花見山を視察し、「小

川にも花見山を」と、1.3haの山林に桜やコブシなど、これまでに8000本以上の苗木を植え続けてきた成果だ。現在はもみじ山も造成中。地域資源を活かすどころか、新たな地域資源を自ら創り出しているのだ。これらの活動の基盤にあるのは、公民館を核にした以前からの地域自治活動だ。準備委員会では、作小屋村がオープンするまでの2年間、総務企画・商品生産加工・イベント・景観施設と分野別に専門部会を設置し検討を重ねてきたが、その回数は、会議、打ち合わせ、研修などを合わせて計100回に及ぶという。

コラム

地域資源を自ら「創る」

農業ジャーナリスト・明治大学客員教授

榊田 みどり

もくじ

● 随 情 ● フォーラム ● 論
想 報 報 説

持続可能な社会とは何か ―農山漁村の役割を考える― (前編)
特定非営利活動法人ECCOPULUS代表理事
早稲田大学文学部学術院教授、立教大学客員教授 高野 孝子 (2)
複合型農業の再興を目指す町 岩手県住田町を訪ねて
〓 地域農政未来塾運営委員長最優秀論文受賞者を訪問〓
町村Navigator……
新任都道府県町村会長の略歴……
篠栗町に生まれて……
福岡県篠栗町長 三浦 正 (11)(10)(9)(5)

写真キャプション

樹齢700年といわれる老杉が鬱蒼とそびえ、雪と静寂に包まれる永平寺。曹洞宗の開祖として知られる道元禅師によって寛元2年(1244年)に創建され、一年を通して全国から多くの参拝客が訪れる。境内では、雲水と呼ばれる修行僧たちが日夜厳しい修行に励んでいる。

視点

持続可能な社会とは何か
～農山漁村の役割を考える～ (前編)特定非営利活動法人ECOPULUS代表理事
早稲田大学文学学術院教授、立教大学客員教授

高野 孝子

雪原がもたらすもの

雪が降っている。外に出て空を見上げると、大小様々な雪の破片が、結構なスピードで次々と顔の上に落ちてくる。

どんどん降り積もって、目の前に広がるいくつもの田んぼは全て雪の下だ。その向こうの道路だけは除雪され、視界の悪い中を時折、車が走っていく。

私が生まれ、今も暮らす新潟県南魚沼市は豪雪地帯として知られる。近年、雪の質も量も変わってきたが、積雪は平地で2メートル、山手の集落では4メートルとなる。

幼い頃は町中がそっくり雪に埋もれた。子どもたちが学校に通えるよう、大人たちは交代で朝から「雪路

み」をして道をつけた。家の玄関を開けると雪の階段があり、登って道に出たのを覚えている。雪道を歩くと、電柱のてっぺんがすぐ目の前だった。

大人たちは雪と暮らす大変さを嘆き、「克雪」「雪害」などという言葉を使う。確かに雪に関連する事故も多い。けれども雪があるからこそ豊富な水があり、稲作ができ、酒も作れる。50年ほど前から始まったスキー産業のおかげで、出稼ぎはなくなり、観光産業を育てることになった。

近代以前、この地での冬の暮らしは今とは比較できないほど大変だっただろう。しかし1000年以上も前からこの地で生を受け渡してきた先人たちは、雪とともに生きる知恵と術を持っていた。だからこそ、

今、私の命もある。大変なのは雪だけではなかったはずで、すべて受け入れてしまえば、雪は恵みでもあっただろう。

私が雪が好きな理由の一つは、雪が全てを覆ってしまった時、そこに原生自然が現れるからだ。雪原の下には、人間が好きなように開発したあらゆるものと営みの痕跡がある。けれども雪に覆われてしまえば、それらは視界から消え、代わりに自分が世に生を受けるよりはるか昔からの人々の営みの記憶が、想像の力を借りて浮かび上がる。自然を思い通りにできないことや、本当に必要なものについて、改めて思いを馳せることができる。

音が吸収されていく独特な空気感の中、ひそやかに確かな生き物の気配を感じながら雪原を進んでいけ

ば、シンプルに、ただ今ここに、生きることに集中できる。すべてとながり、すべてに包まれているような感覚は、私には飲びだ。

持続可能な社会とは

持続可能な社会とはどんな状態だろう。

人間が生きていく上で必要な空気も水もエネルギーも、限りがある存在だ。それらを取り出し、利用し、かつ循環できる社会のことであろうか。

その意味では、農山漁村の優位性は様々に唱えられてきたし、自明でもある。

湧き水がある場所、山菜や木の実や貝や魚が取れる山海、田畑で食料が生産されているところ、燃料とな

論 説

る木が手に入るところであれば、人間は命を保つことができる。このことは極めて重要なことであり、農山漁村の価値と多様な可能性の基盤でもある。

つい最近、山形県出身の早稲田大学学生が、本人の1週間の自炊メニューにおいて「サステナビリティ」を意識した目標を立てた。それは利用する食材において、1) できる限り東京産を使う、2) 関東産を70%以上使う、3) 残りも国産を使う、ことだった。その結果、7日間で使用した55種類の食材で、東京産は3種類のみ。それも唐辛子や辛味大根のブランド商品で、銀座三越の地下の食材売り場で思い切って購入したという。茨城県や千葉県を含む関東産でも20種類だった。これは全体の36%で、努力したにも関わらず、目標だった70%の半分以上だ。学生なりに安くあげようとしたら、さらに割合は下がるだろうという。

2011年の東日本大震災の際、関東周辺でも道路が塞がれ、物流が滞った。わずかな時間のうちに、東京では多くのコンビニやスーパーの棚から食料や飲み物が消え、しばらく入荷がなかった。都市部の脆弱性が露呈した。都市に暮らす人たちの

命を支えているのは、都市以外にある農山漁村だ。

けれどもそのかけがえのない、命と暮らしの基盤を持つ農山漁村に、人々が移り住むべく殺到しないのはなぜか。

人が生きていくとはどういうことかという問いがそこにあると思う。まさにその解を掘り下げていくところに、農山漁村の価値があるように私は思う。

人も社会も持続していくためには、水と食べものとエネルギー以外に大切なものがある。

これまで私は地球上のあちこちで、自然の中で旅をしたり、自然に近い暮らしをしている人たちと関わってきた。その中で経験したのは、人にとって大きな危険は、食料がないとか燃料が尽きたとか、天気が荒れているというようなことよりも、「希望」を失うことだった。「もうダメかもしれない」と思うその心の隙間から、一気に生存の可能性が危うくなる。同時に「美」や「喜び（喜び、悦び）」は内的な大きな力につながることに気づいた。美しい光景や生命力溢れる環境に身を置く喜びは、希望ともなって人を強くしたり、幸福をもたらしたりする。また、

様々な危険に対する最大の防御は、武器を持つことではなく、他の人たちと信頼でつながること、すなわち確かなコミュニティを築くことだと教えてもらった。

消費という豊かさ

持続可能な社会については、国際的な規模でついぶん前から議論されている。特に光があたった1972年の国連人間環境会議からすでに47年。同じ年に、ローマクラブによる「成長の限界」が発表されている。システム分析を駆使して地球の有限性を示し、成長の限界と人類の危機を唱えた。

反論も含めて影響は大きく、ここから持続可能な社会を求めて、各国には様々な機関が設立され、現在に至るまで、国際的な条約も次々と締結されていく。しかしながら、大量消費生産モデルの社会は変わらない。誰もが消費したく、「富」と消費が幸せの尺度であるかのようにそれを追い求める。ピークオイルが過ぎたとされ、鉱物資源の枯渇が目前と示されながらも、「技術革新が状況を打開する」と半ば祈りのように信じようとしている。ITの浸透は、

国を超えるグローバル経済システムをもたらし、世界中で特定の規格が広がり、それを広げた一握りの人たちが極端に利益を得る。結果として、国家間、そして国内での格差は広がり続け、社会不安の要因となっている。近年のアメリカやヨーロッパの政治情勢に見られるのは、この影響でもあろう。

2018年6月発表のOECDペーパーによれば、日本を含むOECD28か国において、わずか1割の世帯が全体の52%の富を所有し、6割の世帯がわずか12%の富を所有するという。また25%の世帯で収入が減っている(<https://doi.org/10.1787/7e1b673-en>)。

2015年のデータでは日本の相対的貧困率（等価可処分所得が貧困ライン以下の世帯に属する国民の比率）は16.1%で、先進国の中でアメリカに次いで二番目に高い(<https://www.globalnote.jp/post-10610.html>)。所得の不均衡を示すジニ指数も、0.34で、OECD38か国の中で格差が大きい方からスペインとともに12番目だ(<https://data.oecd.org/inequality/income-inequality.htm>)。日本は所得格差が大きく、かつ6人に一人が相対的



高野 孝子 (たかの たかこ)

エジンバラ大学Ph.D (野外・環境教育)、ケンブリッジ大学M.Phil (環境と開発)、早稲田大学政治学修士。サステナビリティ、野外・環境教育、地域社会学、分野横断的な環境学を専門とする。

新潟県在住。ジャパンタイムズ報道部記者を経てフリーランスに。90年代初めから「人と自然と異文化」をテーマに、犬ぞりとカヌーによる北極海横断やミクロネシアの孤島での自らの活動を環境教育の素材とするプログラムを地球規模で展開。「地域に根ざした教育」の重要性と「農山村は学びの宝庫」を訴え、07年より新潟県で「TAPPO南魚沼やまとくらの学校」事業を開始。2010年7月公開の龍村仁監督「地球交響曲第7番」に、アンドルー・ワイル博士らとともに出演。社会貢献活動に献身する女性7名に向けた「オメガアワード2002」受賞(緒方貞子、吉永小百合、中村桂子などと共に)。2016年春期早稲田大学ティーチングアワード受賞、2017年ジャパンアウトドアリーダーズアワード(JOLA)特別賞。著書に「野外で変わる子どもたち」(情報センター出版局)、「PBE地域に根ざした教育: 持続可能な社会づくりへの試み」(海象社)ほか多数。

日本学術会議KLaSiCa小委員会委員、新潟県環境審議会委員、千代田区地球温暖化対策推進懇談会委員、日本キャンプ協会理事、日本環境教育フォーラム理事、財団法人日本アウトワード・バウンド協会評議員、日本自然保護協会参与など

貧困レベルで暮らしている国であることを、この数字が示している。

これが、ここまでずっと成長を追い求め、消費を促し、それが豊かさだと唱えてきた日本の現状だ。ここからどこに行こうというのか。本当に持続可能な社会が射程にあるのであれば、これまでの思考や発想を、修正などではなく、そっくり違үүлベルに変えなくてはならないことは明らかだ。

日本での暮らしにおいて、グローバル化の恩恵はたくさんある。けれども伴ってもたらされた負の側面も多い。大地に働きかける生産の場から離れ、自然が命を支えている実感もないまま、消費者として

のみ暮らしについて、金があれば水さえ飲めない。健康を保つ食も手をつけずに簡単に済ませてしまつ。そんな中では積極的に生きている実感を持つことができないし、何が自分にとって大切なのかもその消費世界の中でしか捉えられない。

この約50年、持続可能な社会を目指すとしながら、世界は、そして日本も、持続可能な社会とは逆方向に進んできたようだ。その間に、数多くの論客たちが「パラダイムシフト」を呼びかけてきた。根本的な考え方を変えない限り、持続可能な社会には近づけない、と。

これまで、消費という豊かさを求める勢力と、その限界を主張する勢力

力は、同じ空間にありながら互いに直接対話せず、別々に歩んできた。

日本でもこの二種の言説が同時に存在するが、主流はグローバルマネーと経済成長を求める勢力だ。「持続可能な社会」を掲げ、国際社会の取り決めにお付き合いしつつも、あくまで経済成長を阻害しないことが優先であるため、日本政府の施策は今の至るまで、矛盾していたり場当たり的なものが見受けられる。

一般的に人々は、聞きたいことしか聞かない。信じたいことしか信じていない。SNSが発達した今日は、さらにその傾向が強い。「環境」や「エコロジー」という言葉は、「意識高い系」を揶揄する多くの若い人たちが

には届かない。けれども最近、潮目が変わってきたように私は感じている。

それは、ここまで地球環境が追い詰められ、それが実感できるようになってきたことや、格差の歪みに苦しむ人たちが見過ごせない数となると同時に、格差に気づいた人たちが増えてきたことも背景にあるだろう。また性のダイバーシティや海外からの旅行者や留学生の増加、若者の貧困や非正規雇用、難民や外国人労働者の議論、AIの進出など、世の中の規範が変化してきていることも影響しているように思う。

ワークライフバランスの議論や、閉塞感や生きづらさについての言及など、これまでとは異なる価値に基づいた声が多く聞かれる。

物も情報も溢れ、「消費の豊かさ」に疲れを感じる人たちも多い。自分がどう生きるかを模索しながら、豊かさや幸せを再考する若い人たちが現れている。

農山漁村には、新しい文脈での豊かさや自由をめぐる問いへの解がある。(続く)

現地レポート

町村独自のまちづくり

複合型農業の再興を目指す町

岩手県住田町を訪ねて

地域農政未来塾運営委員長
最優秀論文受賞者を訪問

岩手県

すみ た ちょう
住田町

住田町を訪問

東北新幹線・水沢江刺駅から東へ車で40分ほど、気仙川に沿って国道を進むと、四方を山に囲まれた平坦地が広がる。そこに山の稜線を背景に建つ純木造建築物がこの町の役場庁舎だ。近づくに「森林・林業日本一の町づくり住田町」という看板が視界に入る。庁舎は外観のみならず細部にわたり木材が多く用いられており、高い耐震性と耐熱性を実現している。中に入ると木の香りにつまれ、ここが林業の町であることを実感する。

2018年8月、全国町村会が主催する地域農政未来塾（塾長…生源寺眞一（福島大学教授）の皆川芳嗣運営委員長（株）農林中金総合研究所理事長）が岩手県住田町を訪問した。同塾修了時の研究論文で最優秀賞を獲得した同町

職員の松田登至氏（農政課）を訪ね、塾で学んだ成果やその後の取組などについて伺うためである。

地域農政未来塾は、地域の課題に対して分析や問題提起、行動できる町村職員を育成することを目的に2016年に開塾。各年度5月から翌年1月にかけて概ね月1回程度開講し、各界を代表する有識者を講師に迎え、講義や少人数形式のゼミナール、現地調査などを行っている。農政のみならず地域づくりを担当する若手・中堅職員を対象に毎年度約20名を塾生として受け入れており、修了時にはゼミ講師の指導の下、研究論文を執筆する。

松田氏が研究論文のテーマに選んだのは「住田型農業」の過去・現在・未来」。高度成長期以降、オイルショックなどによるエネルギー革命、都市部への人口流出、バブル崩壊以降の不況など、様々な社会情勢に翻弄されなが





▲ 役場庁舎遠景

町の概要

らも特徴的な農業経営を確立し続けてきた「住田型農業」の変遷をたどり、現在の動向を精細に分析、後継者確保や地域の持続的な発展のために今できることを提言した。この未来への建設的な提案は、地域のみならず農村全体の将来を展望するものとなっており、高く評価されたのである。

町総面積の90%を森林が占める住田町は「森林・林業日本一のみちづくり」を目指している。林業は地域の産業振興の中核を担っており、伐採から製造までの一連を町内ですべて行うシステムを構築し、川上から川下までの木材



▲ 松田氏（右）が町の概要を説明

流通に注力している。また、林業関係者と協力し、森林資材の有効活用、雇用創出を図っており、地域市民と一体となった地域振興を実施している。役場庁舎に隣接する消防署にも木材が豊富に活用されていた。

再生可能エネルギーの導入にも積極的だ。役場庁舎には木質ペレットボイラーによる冷暖房が導入され、循環型資源としての木材の可能性に着目していることがうかがえる。このほかトツプライトを活用した自然換気機能、LED照明や人感センサーの採用による電気の節約、ソーラー街路灯の導入による自然エネルギーの活用など、省エネルギー化に資する設備導入が行われている。

農業では、キュウリやイチゴをはじ

めとする園芸作物、ブロイラーや養豚などの畜産物を生産。換金性の高い作物を作り、狭い面積の中で高い生産性を得るため、町独自の安全・安心農産物認証表示制度を設けて農産物の価値を高めるなどの工夫が施されている。また、地元農産物を学校給食に使用することで地産地消の推進も実施。認定農業者、認定志向農業者への継続的な支援も行われ、様々な制度（国、県、町の制度）を合理的に組み合わせることで、地域農業の持続的な発展を目指している。

林業の町の将来展望

役場庁舎で神田謙一町長、多田欣一前町長と皆川運営委員長が町の現状と課題、将来展望などをテーマに意見交換を行った。2017年より現職の神田町長は、同町出身で獣医師免許を持つ。農協職員、住田フーズ（株）常務取締役などを歴任。町長就任後は、住民参加型のまちづくりを目指し、町民と行政がともに知恵を出し地域のことを考え、協働することの重要性を強調している。役場を訪ねる住民が居心地よく過ごせるよう最大限配慮し、町長室はやや控えめな間取りとなっている。町長の住民への思いやりが庁舎からも感じられる。

住田町には特徴的な条例がある。2017年6月に制定された「こざっぱ

り条例」というものだ。「飾り気がなく清潔感にあふれ、見る人に安らぎや快適さをもたらす様相」を「こざっぱり」と表現し、身近な里山景観を町民が主体的に守り、未来へ引き継ぐことがこの条例の目的だ。「全部を一度にやろうとすれば疲れてしまう。小さなことでもできることから確実にやっていくことが大切だ」と、前町長の多田氏は語る。

先述のとおり、住田町は林業の町。産業としての林業振興のみならず、森林と人間の共生を意識した人づくりを重視し、保育園から大人までの幅広い年代を対象とした森林体験学習「森の保育園」を実施するなど、森林を身近に感じ、その価値を残し伝えていくことの重要性が受け継がれている。地



▲ 木造の役場庁舎内

フォーラム



▲懇談の様子（右から多田前町長、皆川運営委員長、神田町長）

元の高校生やボランティア「森の案内人」が保育園の活動を手伝い、四季折々の自然を楽しみながらの地域・世代を超えた交流も盛んだ。「森の保育園」は好評を得ており、他地域から参加を希望する声も多く聞かれる。「誰も木に育てられていることをわかってほしい」と多田氏は語り、愛用している木製の名刺入れを披露した。「幼少期から木のある生活を経験することで、地域に暮らす人が木材資源の大切さを理解し、生産者や加工者に対する理解や、木の文化の伝承につなげようとする

る」…この思いは多田氏から神田町長に引き継がれ、木育の取組が今後も幅広く展開されることが期待される。皆川委員長は「今は都内のマンション住民だが、内装に木を多く使っている。木の香りのする生活を大切にしている」と応じた。素材を通して生産者を感じる生活スタイルもまた、場所にとらわれない都市と地方のつながりといえるのではないだろうか。

交流を活性化の
キーワードに

松田氏が提案する新しい「住田型農業」は、課題を吸い上げる姿勢、関係機関の連携、農家同士のつながりを3本の柱とする。

町職員が日頃から農家を巡回し、農業者と信頼関係を構築することで、地域の人々の思いや課題を把握することが可能となる。さらに、それを関係機関が共有することで、農家に対して適切な助言・提案を行うことができる。また、従来の住田型農業に見られた農家同士のつながりを後押しし、相互に問題点を指摘する関係を構築することにもつながる。長年苦楽を共にした農業者同士であればこそ、お互いの言葉を信用して、生産意

◀ まちや世田米駅



欲の向上のために切磋琢磨することができる。こうした農業指導体制を構築し、関係機関と農家が「丸となり農業振興を図ることで、衰退の危機に瀕する中山間地農業を持続可能なものとする考えだ。

さらに、農林業や地場産業の後継者確保のために交流の促進を図り、都市に暮らす外部の人々にとって、住田を「非日常的な場所」から「日常的な場所」へと変えていくことの重要性も指摘した。これらの提案が目に見える形として表れている場所がある。住民交流施設「まちや世田米駅」である。

ここは100年以上の歴史を持つ古民家を改修しコミュニティカフェ、レストラン、ギャラリーなどを備えたまち住民交流拠点施設である。改修前は菅野家という実業家の住居兼店舗として使われていた町家



▲蔵ギャラリー

で、大正時代には養蚕繭の仲買商や住田で産出されていた砂金を扱う金銀冶金商などいくつもの看板がかかっていた。この施設を町内の有志でつくる（一社）SUMICAが町から指定管理を受けて運営している。

法人副代表の植田敦代氏は岩手県花巻市出身。大学進学を機に上京、東日本大震災の後、地域のために何かできることはないかと考え、岩手県にUターンした。いわて復興応援隊に着任し、住田町観光協会へ配属されたことをきっかけにこの町に移住。地域事業者とし

ターン移住者が協力し、カフェやレストランの運営、施設内の蔵を活かしたギャラリーなどを展開する。夕方になると学校帰りの子どもたちが集まって宿題をしたり遊んだり、地域のお年寄りが集まって談笑したりする様子が見られ、ここが地域の人々の居場所、小田切徳美明治大学教授（地域農政未来塾主任講師）がいう「地域の縁側」になっていることがよくわかる。

植田氏は、「まちや世田米駅」を拠点として、住民が地域に誇りを持ち、地域の魅力を発信することで関係人口を増やし、地域にかかわる人々みんなと一緒にまちを盛り上げていきたいと将来の展望を語った。

松田氏は「ふるさと住田会」の活用



▲まちや世田米駅にて、植田氏(右)と皆川運営委員長(左)

も提言した。「ふるさと住田会」は主に首都圏在住の住田町出身者で構成され、郷土愛に基づき会員相互の親睦と啓発を図るとともに町の発展に寄与することを目的とする。松田氏は町と結びつきのある人について、同会会員だけでなく、その家族の存在にも注目。出身者の家族も対象にすると、町に縁がある人は首都圏だけでも町人口の約8割に相当することから、この裾野の広さを後継者確保のための孫ターンの呼びかけに活用できると考えた。こうした「縁」を広げる施策を展開することで町の将来を「自分ごと」として当事者意識をもって考え、語り合い、行動する人が増えるのではないかと提言したのである。

未来塾のこれから

松田氏は共に学んだ2期生や前後期生と引き続き情報共有しながら、地域の課題を今後も模索したいと語る。地域農政未来塾は農政や地域振興に関する知見を獲得することのみならず、塾生同士や講師との関係構築など、担う役割は多岐にわたる。

塾生が未来塾から得るものは様々である。月1回上京し全国の町村職員仲間とともに学び議論する時間は、再度地域を見つめ、考え直すきっかけを与えてくれる。

全国町村会経済農林部 松林

ー金融で地方財政を支え 地域の未来を拓くー



地方公共団体金融機構(JFM)は、全ての地方公共団体の 出資による地方債資金共同調達機関です。

第1

全ての都道府県及び
市区町村が出資しています

地方公共団体が共同で資金調達を行うための機関です。

第2

長期・低利の資金を
提供しています

期間は最長 40 年、利率は財政融資資金と同率※でお貸ししています。
このための財源として、公営競技納付金を活用しています。

※機構特別利率対象事業(平成 30 年 12 月時点)

第3

資金運用に J F M 債を
ご活用ください

J F M 債は、強固な財務基盤を背景に信用力が極めて高く、格付けは国債と同水準※です。多くの地方公共団体にも、確実かつ有利な運用方法としてご評価いただき、10 年債、20 年債や投資家のニーズに応じた様々な年限の F L I P 債などをご購入いただいております。 ※平成 30 年 12 月時点

第4

資金調達などの財政運営全般の
サポートをしています。

財政、金融、会計等に関する研修(出前講座、宿泊型研修、入門研修等)を実施するほか、金融専門知識、実務経験を有する職員が助言などを行っています。

債券ご購入時等の留意事項について

当機構の資金調達計画を含めた将来的な見通しは、現時点で当機構が得ている情報に基づくものであり、潜在的なリスクと不確実性を含んでいるため、マーケットの動向や経済状況、法令といった様々な要因により、将来の状況はこの資料の記載とは異なる可能性があります。そのため、投資家の皆様におかれましては、慎重に判断し、リスク等に十分に留意した上でご購入等されることをお奨めいたします。

詳しくは当機構HPをご覧ください。 >>> <http://www.jfm.go.jp>



新任都道府県町村会長の略歴

山口県町村会は平成30年11月12日の臨時会で次の通り会長を選任した。

(12月11日就任)

山口県町村会長

大島郡周防大島町長

椎木 巧

昭和23年3月20日生



【住所】大島郡周防大島町大字西安下庄2049番地1

【町村長としての当選回数】3回

【町村長に就任するまでの経歴】▽

昭和41年4月橋町入庁▽平成16年10月〜12月16日周防大島町総務部長▽平成16年12月17日〜平成19年3月31日周防大島町助役▽平成19年4月1日〜平成20年7月20日周防大島町副町長▽平成20年11月14日〜周防大島町長

【町村会関係の経歴】▽平成29年山口県町村会副会長

【主な業績】▽デジタル防災行政無線整備(全戸個別受信機設置)▽全戸光ケーブル整備▽町立病院改築▽学校改築、耐震化、空調整備▽中学生までの医療費無料化▽安下庄地区、久賀・大島地区下水道整備▽体験修学旅行誘致▽観光交流人口100万人達成▽定住促進協議会設立▽サテライトオフィス誘致

【趣味】読書

【家族】妻

季節に拾う・新歳時記(2月)

イワシ

2月3日は節分。節分は「季節を分ける」という意味で、かつては年4回あった。立春、立夏、立秋、立冬それぞれの前日に当たるが、現在の暦には立春の前日だけが記されている。

季節の変わり目には、邪気が入りやすいと考えられ、さまざまな邪気払いの行事が行われてきた。その一つが焼いたイ

ワシの頭をヒイラギの枝に刺し、門口に立てるといふもの。鎌倉時代の歌人の歌にも詠まれており、この風習は鎌倉時代には定着していたようだ。イワシを焼く臭気とヒイラギの葉のギザギザで邪気を払うとされ、「やいかがし(焼い嗅がし)」と呼ばれている。

かつては漁獲量が激減した時期もあったイワシ。近年は豊漁傾向が続いている。

●建国記念の日

祝日法で定められた国民の祝日。日本書紀で神武天皇が即位したとされる日を根拠に、明治政府が2月11日を「紀元節」と定めた。紀元節は戦後廃止されたが、1966年6月、改正祝日法が成立し、敬老の日、体育の日とともに祝日に加わった。

戦前の紀元節は、四方拜(1月1日)、天長節(4月29日)、明治節(11月3日)と並ぶ四大節(祝日)の一つ。「紀元二六〇〇年」を1年かけて盛大に祝った40年の紀元節には、昭和天皇が特別に詔勅を頒布し、恩赦が発令された。

戦後の再祝日には、昭和天皇の弟の三笠宮さまが「歴史的な根拠がない」と反対の論陣を張った。今でも賛成・反対両派の集会が行われている。

●西行

平安時代から鎌倉時代初期の歌人。元の名は佐藤義清。鳥羽上皇の御所を警護する北面の武士だった。北面の武士は弓馬に優れているだけでなく、文芸の素養もあり、義清も和歌と故実に通じた人物として知られていた。

だが、23歳で出家、妻子も捨てた。その理由として、親しい友の死や失恋など諸説ある。出家して自由となった西行は各地の歌枕をたどる旅をする。陸奥、高野山、伊勢、熊野。その先々で歌を詠んだ。西行の歌は、実際にその場所に行き、自らの心情を語るように詠んだもので、後の後鳥羽上皇や宗祇、芭蕉にまで影響を与えた。1190年2月16日(旧暦)、死去。享年73。如月の満月の頃に死にたいという願いどおりの往生だった。

車両共済(保険)のご案内

この車両共済(保険)は、町村生協の自動車共済で補償する対人賠償、対物賠償、限定搭乗者傷害等に加え「ご自身のおクルマの補償(車両保険)」を追加する制度です。お車が衝突した場合や台風・いたずら・盗難など偶然な事故で損害を被ったときに、共済(保険)金をお支払いします。

●お見積りのご請求・お申込み・お問い合わせなどは、下記までご連絡ください●

株式会社 千里 (取扱代理店)

〒100-0014 東京都千代田区永田町1-11-32 全国町村会館西館内

●ホームページアドレス <http://www.chisato-ag.co.jp>

お電話の際には、車検証をお手元にご用意ください

(受付時間：祝日、年末年始を除く月～金 午前9時30分～午後5時)

TEL 0120-731-087 FAX 03-3519-7325

- 「車両共済(保険)制度」は、全国町村職員生活協同組合と損害保険ジャパン日本興亜株式会社とが集团協契約を締結し、実施しているものです。
- 集团協としてご契約いただけるのは、保険契約者および被保険者が損保ジャパン日本興亜の定める条件を満たす場合のみとなります。

このご案内は概要を説明したものです。詳細については、取扱代理店(千里)までお問い合わせください。

(車両保険引受保険会社) 損害保険ジャパン日本興亜株式会社

[SJNK17-16682(2017.12.28作成)]

随 想

● 篠栗の町

九州、そしてアジアの玄関口である福岡市に隣接する糟屋郡（7町で構成）は、福岡市のベッドタウンとして、人口減少時代にあつて今なお人口増加を経験している日本のなかでも数少ない地域です。その糟屋郡最東部に位置するのが町篠栗町で、町域39㎢のうち約7割を森林と山間地域が占める山里です。福岡市に隣接する他の町のように顕著な人口増加はみられないものの、三方を

随 想

篠栗町に生まれて



み うら ただし
三 浦 正
ささぐり 福岡県篠栗町長

山々に囲まれる雄大な自然環境でありながら、博多と筑豊を結ぶJR篠栗線が東西に走っていることから博多駅まで快速で18分と交通利便性も良く、近年注目されている町です。また、篠栗四国八十八ヶ所のお遍路の町として栄え、総本寺南蔵院には世界一のブロンズ涅槃像があり、国内外から年間約100万人の参拝者が訪れます。町内にすべての札所があることから、健脚の持ち主なら二泊三日で回ることができると手軽さもあり、そのご利益を求めて巡礼される姿もみられます。

● 私の原体験

この町に生まれ育った私が、父に誘われて一緒に歩いて遍路をしたのは、大学に落ちた春でした。緑映える新緑の景色を楽しみつつ、それぞれの札所や茶屋でお接待を受けながら清々しい気持ちになったことを今では懐かしく思い出します。とはいえ人生中々上手くはいかないもの、また次の年も大学に落ちてしまい、失意のなか再びお遍路へ。その甲斐あつてか翌年には無事に入學でき、お礼の気持ちで三回目のお遍路に至ります。この三年連続のお遍路で私はすっかり自分の生まれ育った町、篠栗の虜になってしまったような気がします。

● 町長になって

そうした青春時代の原体験があつたのでしよう。地元で銀行に勤めておりましたが、平成十六年、五〇歳の時にご縁があつて乞われ、一念発起して町長に立候補し、当選して町のために働くこととなりました。まず取り組んだのが、恵まれた環境を活かした「森林セラピー基地篠栗」の発信。私自身も森林セラピストとなつて仲間と活動しながら、町内外の人に篠栗の山の素晴らしさ、五感を開いて心を鎮めることの重要さ等を伝え始めました。それから早十五年、白髪頭になりつつも、情熱を絶やさことなく、住民の福祉の向上とまちづくりに取り組んでおります。

● 「篠栗町まち・ひと・しごと創生総合戦略」

私が町長になったところから、国の政策も大きく変化し、三位一体の改革や政権交代、東日本大震災等各地の災害を経験し、顕著となった人口減少社会を見据えた、初の人口維持政策としての「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の名のもとに、それぞれの自治体が個性を打ち出して、その存続をかけた取組が求められる時代となりました。それまでの地方交付税頼りのいわゆる三割自治体であるわが町も、変わらなければならぬという思いで「篠栗町まち・ひと・しごと創生総合戦略」の実践に取り

組み、その中心となる事業として三年前から新たな食品系工業団地開発に着手し、現在、2021年開業に向けて事業を進めているところであります。福岡市にある辛子明太子製造販売会社が、本社・工場移転を発表、北九州市に本社のある珈琲焙煎販売業者からも、東アジアに誇れる焙煎工場を建設し、自社のコーヒー豆を広めたいと、その意気込みを表明していただいています。21世紀にふさわしい、産業ロボットを駆使した新しい食品系工業団地が新たな篠栗町の核として機能し始め、周りを囲む山々の緑に馴染んで、人が訪れる、人を呼び込む町に変化すると信じています。

● これからの篠栗町

私も経験してわかったことですが、多くの先輩方がお話しされているように、まちづくりは、長期ビジョンを持つて、軸のブレない政策をきめ細かに積み重ねていったなかに、初めて花開くものだとつくづく感じています。すべてが私の時に完結するものでもなく、また新たな芽が出て、次の世代に花が開く。その積み重ねこそ持続可能なまちづくりの具現化ではなからうかと感じます。私は情熱を持ち続けて頑張りますが、賞味期限が切れる前に次の世代にバトンタッチをして、篠栗町の更なる発展を楽しみたいと思っています。

「都市農村共生社会創造シンポジウム2019」 開催のお知らせ

世界に通用する農山漁村 ～地域づくりは新たなステージへ～

農山漁村における地域づくりの取組みは、時代や国境を越えた普遍的な価値を持っています。

農山漁村が長い歴史の中で紡いできた地域資源を見つめ直し、

これを活かすことがいまこそ求められています。

世界と直接つながる時代、世界に通じる“本物”を見つけ出し、磨くにはどうすべきか。

地域からの発想と行動による、地域づくりの新たなステージを“外からの目線”を中心に展望します。

2019年3月9日(土) 13:00～16:45 (開場 12:30) 参加料：無料 定員：250名

全国町村会館 2F ホール 東京都千代田区永田町 1-11-35

基調報告

13:05～13:50 「地域づくりとインバウンド」

ザ・ジャパン・トラベルカンパニー (JTC) 株式会社代表取締役 **ポール・クリスティ 氏**

なぜ、大分の谷間で旅行業を営むのか、年間2千人の外国人を引きつける魅力は何か。「地方が秘めた可能性の生きた見本」を企業理念に掲げるJTC流地域づくりの神髄を語る。



13:55～14:40 「欧州の美しい農村をだれが創っているのか ～景観・環境からみた農村の価値～」

学習院女子大学副学長・教授 **莊林 幹太郎** (しょうばやしきたろう) 氏

訪れる人々を魅了し、住む人々も誇りを持って守り続ける欧州の農村。駐在経験や政策担当者らとの交流から得た、その意識的な取組を紹介し、日本の農村のあるべき姿を語る。



パネルディスカッション

15:00～16:45 「世界に通用する農山漁村」

何が魅力なのか、なぜそこに住み続けるのか。世界に通用する日本の農山漁村の価値について議論し、将来を見据えた新たな地域づくりを展望する。

コーディネーター

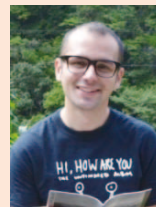
●学習院女子大学副学長・教授 **莊林 幹太郎 氏**

パネリスト

●北海道社警町
移住・情報発信アドバイザー
岡・ドルゲ・コジマ 氏



●anaguma文庫代表
(奈良県川上村)
エリック・マタレーゼ 氏



●ザ・ジャパン・トラベルカンパニー株式会社代表取締役 **ポール・クリスティ 氏**

【主催】 全国町村会

【協力】 一般財団法人地域活性化センター (申請中) 一般社団法人農山漁村文化協会 (農文協)

【申込み先】 (問い合わせ：全国町村会経済農林部 Tel.03-3581-0485)

①氏名、②職業(組織名・学校名等)、③Phone./Fax.、④E-mailを明記の上、

Mail: sympo@zck.or.jp Fax.03-3580-5955 までお送りください。

登壇者のプロフィール等詳しくは、全国町村会HP (www.zck.or.jp) をご覧ください。